

〒060-0808

札幌市北区北8条西6丁目2-23-806

TEL 011-594-8454

FAX 011-594-8455

URL http://tomari816.com

E-mail info@tomari816.com

郵便振替口座 02790-1-100850

原発のない安全な北海道に



HAIRO ニュース

第15回 法廷だより

2015年10月13日、第15回口頭弁論が札幌地裁で開かれました。

今回は、約30年間、反原発運動に携わってきた壮瞥町の原告、上野白湖（あきこ）さんが意見陳述しました。

肌寒い雨天ながら
傍聴席は満員

2015年10月13日午後3時30分より札幌地裁で、第15



回口頭弁論期日が開かれました。断続的に雨が降る肌寒い日でしたが、傍聴席は（抽選はなかったものの）満席となりました。

今回の期日でも、原告側から準備書面1通が陳述されました。この準備書面は、弁護団の内山成樹弁護士を中心に作成した、地震動の想定方法について主張するものであり、これまでの主張を敷衍してこの論点について総括的に主張するものでした。また、地震動に関する書籍や論文などの証拠も提出しました。

回までに提出できるかはわからないとのことでした。

内山弁護士による準備書面の要旨の説明

次に、原告側弁護団の内山成樹弁護士が、地震動について主張した今回の準備書面の要旨を口頭で説明しました。その内容は、(1)地震の科学には複雑系ゆえの限界があること、(2)電力会社などの断層モデルを用いた手法はモデルを極めて単純化、簡略化していること、(3)断層モデルを用いた手法には限界があり、既往地震の地震動の再現も十分にできないこと、(4)断層運動に予測できないことが起こりうること、(5)地下での地震動増幅の有無や程度も現代科学では予測できないこと、(6)要するに地震現象は極めて複雑で、われわれの科学では詳細な想定など不可能であるのに、原発を運転しようとすることは無謀であること、といったものでした。

原告意見陳述

続いて、原告団から、上野白湖さんが意見陳述を行いました。上野さんは泊原発から

60kmの距離にある壮瞥町に住み、反原発運動を30年近く続けてきたことを踏まえて、原発が命の問題であることを、5つのポイントにまとめて述べました。（意見陳述の内容は2ページ。）

今後の予定ほか

今回、被告からの反論の予定が見通せないことについて、傍聴された方の中から疑問の声も上がっていました。

他の訴訟での様子から考えると、被告電力会社側は、原子力規制委員会での承認を得られるのを待って反論を活発化させるのではないかと推測されます。これは、規制委員会のお墨付きも裁判所に影響を与えると思われるためです。原告側としても、裁判所が（判決理由に直接は書けなくても）無視できないような世論を作っていくことが運動目標になり得ると思います。

次回期日は、平成28年2月16日（火）午後3時30分からです。次回もたくさんの方に傍聴においでいただき、ともに廃炉への意志を表明していきましょう。

（文責・竹信航介）

第15回 口頭弁論意見陳述

原発反対の30年



原告 上野 白湖 あきこ

た。無知だった当時の私は、人間の素晴らしさに、ときめきさえ覚えたものです。

しかし、90年代に初めて、その恐ろしさと犯罪性を知りました。恥ずかしいことです。それだけに後悔と恥と怒りを叩き付けた思いが募ってまいります。原子力有用論は成り立たちません。原子力・原発は弱者を平気で犠牲にする、ということに尽きます。

政府・電力会社の責任は重い

私は上野白湖と申します。過去30年足らずの間、反原発関係の活動に携わって参りました。現在有珠郡壮瞥町に退職後20年余り住んでおり、泊原発の半径60kmの位置にあります。活動としては、ささやかながら「非戦いぶり」という学習体を主催し、会報を「非戦」と名付け2ヶ月に1回発行し、60号を終えました。またやむにやまらず3・11が起きて間もなく仲間と共に反原発金曜日デモを月2回、声をみんなで挙げ、現在に続いていきます。

廃炉の会には発足当時から関わり、多くの友達や知り合いも誘ってきました。また、もっと広い世界で多くの皆さまの後を追いついて、連帯のひとかけらとして参加し、地元の間にも伝える役割を担う必要があり、この場に立つことに致しました。その意をお汲み取り下さい。

約40年前、第3の火という希望に彩られて原発はデビューしまし

以下に私の反原発の要点を5項目に整理して申し上げます。

1 ▼ 内部被曝

3・11の事故後、子どもたちには、日を追うごとに内部被曝による甲状腺ガンとその転移などによる危険性が増大しています。福島県の調査によれば、2011年から3年間で計30万1707人の18歳以下の子どもの検診結果は、甲状腺ガン87人、疑いのある子ども30人、合計117人でそのうち87人はすでに甲状腺の切除手術を受けています。疑いのある子どものうち細胞の組織検査を終えて問題が見つかった28人を合わせると、115人の発症となっております。この年齢層では過去35年間の統計では10万人あたりの発症率は年間0・175人に過ぎず、福島島の発症率はその72・6倍にもなります。

2 ▼ 被曝労働者

原発は、常時、労働者に被曝を強いるものです。これはある被曝労働者の例です。

「悲惨極まりない非道な実態がありました。原発被曝労働は、まさに使い捨てのポロ雑巾のような仕事であり。それも下請け・孫請けなどはまだマシでひ孫請けのそのまた何次の下請け構造があり、下層にいくほど命を削る仕事が行っている。さらに現場の状況は、放射線バッジを外して働くハメとなっている。つまり、ともにバッジを着けているとすぐにブザーが鳴ってしまい、そうすると

「ああ、お前は明日からもう来

なくてもいいから」ということになる。それでバッジを外し高温多湿の現場で死にそうな仕事をやらされる。もしガンになっても放射線との因果関係は証明されず労災が降りることはない。蒸し暑さでマスクもゴーグルも外さざるを得ず、ガンの恐怖にさらされ続ける。」

私達は、生きとし生けるものとして、人の命を犠牲にして生き延びるべきではありません。現在原発は殆ど機能していません。必要がないものを維持するのは他に目的があるからでしょう。

3 ▼ 地球と生命

原発は環境汚染をもたらし、それが地球と生物の存続を危うくしています。

原発は原子炉を冷やし続けるために海水を大量に汲み出し、もとの水温より7℃も高い温排水を海に流します。これによって多くの魚やプランクトン・卵や海藻も影響を受けます。温排水は、海面の水温を上げ、地球系を破壊しています。漁業者は、魚や貝が取れなくなつて地域は衰退し、村のあり方を変える程深刻な状況が伝えられています。

また、原発の煙突からは、つねに微量の放射線が放出されています。それが雨に混じって降り注ぎ、子ども達の免疫細胞を破壊し、遺伝子を傷つけているのです。

4 ▼ 核ゴミ

原発の核ゴミは膨大にもかか

わらず、処理のメドは、まったくついていません。唯一六ヶ所の再処理工場が造られました。稼働の見通しがいい中で、保管場所は満杯に等しいのに、どの地域でも危険な核ゴミの受け入れは避けています。

5 ▼ 原爆の材料

最後に、原発から生み出されるプルトニウムは、本来、原爆をつくるためのものでした。長崎の原爆は、アメリカの原子炉でつくられ、プルトニウムの効果を試すモルモットにされたのが長崎の犠牲者です。それは70年を経た現在も決して過去のものとはなり得ないのです。

そんなものを燃料として再利用するプルーサーマル計画に、ばく大な税金を使い、大事故を起こし、実現の見通しどころか実態も明らかにされてはいます。プルトニウムを貯め込むことは、いつでも日本の核武装への転用を容易にし、原子力規制委員会の項目に安全保障が加えられた今日においては戦争への道を開く危険もあります。大荒れの国会審議や、ごまかしと横暴の採決を見ると、いつそう危険は深まります。武器作りにも資する原発は、直ちに廃炉にすべきです。速やかに核燃料を撤去し国民の安らかな暮らしを保障するのが政府、国家の義務だと主張します。

裁判長、どうぞよろしくお願

口頭弁論報告会

強い雨がどうにか止み、大通り公園には傍聴希望者32人が集まり、揃って裁判所に入りました。抽選はありませんでした。今回は法廷が早く終了し、北海道高等学校教職員センターでの報告集会は予定より早い午後4時15分に始まりました。参加者は44人。弁護団からは、団長の市川守弘弁護士、難波徹基弁護士、竹信航介弁護士、そして7月の第14回口頭弁論に引き続き東京から内山成樹弁護士の4人が出席しました。

冒頭、難波弁護士が、被告の北海道電力が一切何も反応しない裁判状況について「また元に戻った、と感じたのではないのでしょうか？」と切り出すと、会場から一斉に呆れ笑いやため息の入り混じった反応があり、報告集会のみの参加者から「皆さんの怒りが分かります」という感想が寄せられるほどでした。

今回、内山弁護士は、電

力会社側の地震対応における想定手法には「実用性がない」とする「認識論的不確定性」について主に解説し、「地震現象は複雑。事後にさえ再現できず、事前想定は不可能。極めて高い安全性が求められる原発で、この想定手法でやっていいんですか？ということです」と述べました。

この後、森山軍治郎事務局長は、原発問題への社会的関心の薄れを指摘し、廃炉への動きを活発化させる取組みについて会場からの意見を促しました。これを受けて「被告側の動きを待つのではなく、早く裁判を結審させてはどうか」という意見や、「一人ひとりが（裁判に）勝つ方法を真剣に考えていかなければならない」という決意、「地震の危険性にだけ限定せず、火山爆発やテロの可能性も追及してはどうか」という提案などが次々に出され、それぞれについて市川弁護士が廃炉の会としての方針を丁寧に説明し「勝利に向けて全国の弁護団と連携し作戦を練っていく」という強い決意を新たに示しました。また、札幌の消防団員という男性からは

「事前の計画も検討もないまま、一般市民である消防団員が原発事故の際には危険な場に導入されていく」という危機意識の共有がありました。

なお、集会前のDVD鑑賞会には4人が参加し、3・11から2カ月後の小出裕章氏インタビュー映像「福島原発で何が起きているのか」その3を観ました。参加者から「（小出氏の）分析がそのまま現実になっていった。あれから4年が経過しても、タイムトルの通り、何が起きているのかは私たちに知らされていないことばかりです」との感想が寄せられました。

（事務局・志堅原郁子）

報告会アンケート

・口頭弁論に参加して、裁判官のやる気のなさ、北電の誠意のなさに空しさを実感します。

・統計が出て明確になっていく癌の発症率が多い泊、岩内の話は道民にとってショックなことです。健康面でニュースに取り上げ、道民にアピールする運動は多くの人に受け止められる気がします。ここに力を入れるわけにはいきませんか？

口頭弁論傍聴記

原告 韓 守賢

この度、機会を得て、泊廃炉訴訟第15回口頭弁論を傍聴する機会に恵まれました。そして、被告側弁護士が原告側の主張に対し反論を引き伸ばしているという現実を知りました。まともな弁論すら成立しないという現実が残念です。私は「3・11」前までは核（原子力発電）の脅威について知ろうとしていませんでした。否、もしかしたら今も、本質的な意味においては変わっていないのかもしれない。人間は安きに流れます。流れに抗し、緊張しつつ、あきらめないこと。人の尊厳が守られることを願い、声を上げ、具体的な行動を起こすこと。それはとても難しいことです。

しかし、今、この日本社会では、原子力発電所は再稼働され、核技術は他の国に輸出されている。何よりも、深刻な被曝を経験している Fukushima の地で「3・11」前と同じ生活を送らせようとする圧力が増している。大切な情報は隠され、基準値は引き上げられ、被害は矮小化されている。そのようなにして、命が傷つけられているのです。一方、その陰で、経済的な利益を得ている人たちがいる。ある人の命と、この人の命に差がつけられている。命に値段がつけられているのだと思います。これまで私は泊廃炉訴訟への関心をなかなか深められなっていました。理由は何だっつけられるでしょう。しかし、核は命を傷つけるということを忘れてはいけません。改めて、自戒します。一人ひとりに、愛する家族や友人の顔を思い浮かべます。そして、神によって与えられた自らの命を生きていきたいと祈ります。泊廃炉訴訟を支えていらっしゃる方たちに感謝の気持ちを伝えたいです。

脱原発カフェ in チカホ

10月18日(日)、昨年に引

き続き第2回目のチカホ(札幌駅前地下歩行空間)でのイベントが開催された。今回は「廃炉の会」単独の企画で、サブタイトルは「再稼働反対、原発ゼロなら北海道は元気になる」。写真展示、署名活動、出前講座と書籍などの販売、お茶サービスなどで構成された。

写真展示は会員からの提案もあって、加賀谷雅道さんが特殊な技法を駆使し放射能を

可視化して撮った写真作品。

福島原発事故で落ち葉、キノコ、軍手、長靴などに付着した放射性物質が見える。恐ろしい放射能は肉眼では見えないため、観客は作者の解説を読みながら熱心に見入っていた。

署名活動は「廃炉の会」が6月から独自にはじめたもの。「全道避難計画ができないなら再稼働を認めないで!」と「北海道に核ゴミを持ち込まないで!」の2種

類。いずれも道知事に宛てたもので、自治体の首長には道民の安全を守る責務がある。これらへの署名を一般の歩行者に呼びかけた。この日、「再稼働を認めないで!」は376筆と「核ゴミを持ち込まないで!」が352筆の署名があった。ふだんは原発に関心をもっていない歩行者も説明を聞いて署名していた。

出前講座では小野有五共同代表が再稼働された川内原発を例に最近の原子力規制委員会の判断の甘さを指摘した上で、原発から出る核ゴミの地層処分危険性を訴えた。世話人で「核ゴミ」と避難計画

を担当しているマシオン恵美香さんも飛び入りで話した。とくに三日後に予定されている道庁実施の泊原発から30キロ圏での防災訓練の参観参加を訴えた。これにより3人の参観参加者が加わった。新しく企画されたものとして、常田益代共同代表のミニ講座「原発から再生エネルギーへ」と「廃炉の会」弁護団の竹信航介弁護士による「原発と裁判」の講話があった。

メインの出前講座は世話人の川原茂雄さんの「原発のお話」と「福島のお話」だ。それぞれ1時間にわたる話だった。出前講座のベテランで、

スライドを使った豊富な経験をまじえた話をわかりやすくよく通る声で20席余りの聴衆を魅了した。通路の立ち席で聴いている人もいた。

イベント会場のスペースは半年前の予約段階で昨年の3分の2の広さしか確保できなかった。講座にせよ署名活動にせよきわめて窮屈なスペースで実施された。書籍やステッカーなどの販売スペースも不十分だった。にもかかわらず、紅茶のサービスは人気があったようだ。

イベントには会員のボランティアでの協力もあった。(事務局長・森山軍治郎)



かわはら先生の出前講座はいつも超満員



放射能を目で見る写真展



ミニ講座で弁護士に質問



子ども達も署名に参加



NHKの取材

北海道原子力防災訓練見学報告と 泊村・神恵内村の避難路について

世話人 小林善樹

10月21日、後志地方で北海道原子力防災訓練がおこなわれたので見学して来た。昨年までは、道が手配したバスに乗せてくれたのだが、今年は招待した道外の自治体職員でバスが満杯だとか、他の市民団体と不公平になるとかで、乗せてはくれず、見学しただければ自分たちで交通手段を講じろ、というので、友人たち10人が自家用車2台で出かけるを得なかった。道民が希望したならば、バスの台数を増やしてでも対応すべきだろうと苦情を申し立てることにしたい。なお、道が仕立てた2台のバスは実際にはガラガラで2台に40人ほどしか乗っていないかった。

今回の訓練は、3号機が定格運転中、7時30分に内陸地震発生。EAL1(警戒事態)発令、8時30分訓練開始。北風との想定で南側だけの避難とし、東側と北側は屋内退避とする。津波は発生しないとの想定であった。これらの想定は、実態には合わないのではないだろうか？

訓練要員が想定事故発生時



避難訓練

刻の前に行動を始めているのは大いに問題だ。事故発生後、北電が知事に報告し、知事からの指令を受けてから、準備を始め、行動を開始すべきであろう。

ヘリコプターによる避難が泊中学校と蘭越の廃校になった小学校のグラウンドでおこなわれたが、豪雪地帯の冬のグラウンドは除雪されているのだろうか？

寿都の漁港から漁船で10人の老人が、沖合で巡視船に乗り移って避難する計画だったが、波が高いため危険だと判断し、港外に出るのは取りやめになった。私の見る所では、たいした波ではなく、あれで危険ならば船による避難は無理だろう。特に老人子どもそ

して障害者には無理ですね。

一方、私はかねがね泊村と神恵内村からの避難路がいつも通れるのか危惧していたのだが、10月11日機会があったので、2本の避難路の中の一つ、当丸峠を通る道道998号線を通って来た。まずは原発から五百mほどしか離れていないホリカップトンネルを越え、国道229号線を通るが、入江をまたぐ壮麗な橋がある。泊村から神恵内村に入り、道々に分岐する。つづら折りの山道となるが、この道にも谷間をまたぐ橋がある。

まだ秋だったのでさしたることもなく通って来たが、冬になったらたいへんなことは容易に想像される。橋というのはのは下面を吹き抜ける風によってよく冷やされるので、道路よりは凍りやすい。横風も受けるので、冬の間は住民も怖くて通らないのだそう。積丹半島の西側を回る国道229号線は冬期間波浪が激しく、道々998号線は大雪のため、しばしば通行止めになる。トンネルも多く、地震があれば崖崩れで通行止めになることもあるだろう。二つの村の二千四百人の人たちには、年中安全な避難路は確保されていない、ということ踏まえて原発の再稼働を阻止して欲しい。

「六ヶ所村核燃料サイクル施設を巡って」

高レベル放射性廃棄物担当 世話人 マシオン恵美香

折しも、六ヶ所村にある高レベル放射性廃棄物を貯蔵する施設で、放射性廃棄物を収納する容器の一部にサビが見つかり調査中という話題があった8月末から9月頭にかけて、「なくそう核燃・青森ネットワーク」

に招かれ、北海道の原子力問題について講演する機会をいただきました。青森、三沢、六ヶ所、むつにある核関連施設を一巡し、三沢基地をはじめ、下北に核燃施設などが誘致された歴史的・経済的、背景などについて詳しく解説していただきました。

再処理事業全体の経済性の破綻(現実に大量に存在する高レベル放射性廃棄物には二千数百年後まで保管のための費用を投じる試算がされ



六ヶ所村核燃料サイクル施設

ている)や、原子力防災計画と避難路の不備(廃棄物処理の技術的問題の解消が先送りされ危険回避の方法が考慮されていない)が、下北核燃施設でも問題となっています。

日本原燃ゲート前でのこと、核関連施設のどこもが監視体制を厳重にすることは当然ですが、筆者が降り立ったとき、遠くから監視していた係り員がすぐに飛んできて用件や行先を尋ねられ、写真撮影やゲートに歩み寄ることを禁じられました。道なりに次のゲートを通りかかると、すでに別の監視員たちが待っていると、いう嚴重さなのに、ウラン濃縮工場のすぐお隣の建物は、なんと「六ヶ所村学校給食センター」。監視体制の嚴重さに反し、「原子力事故時には、ここで炊き出しをする予定」というセンスの無さや、学童たちは、ここで調理された給食を配膳されているという現実、命が軽視されていると感じました。通りかかった秋祭りのテント群の中にも経産省資源エネルギー庁の委託で日本原子力文化財団のブースがあり、ショッピングセンターや公共施設に必ずPRコーナーが設置されており、地域の原子力依存を示していると感じました。

泊周辺地域の がん死亡数の増加について



西尾正道

◆プロフィール◆

北海道医薬専門学校 学校長、厚生労働省北海道厚生局臨床研修審査専門員、独立行政法人国立病院機構北海道がんセンター名誉院長、「市民のためのがん治療の会」顧問、認定NPO法人いわき放射能市民測定室「たらちね」顧問

核兵器製造や原子力発電を推進する上で問題となる健康被害

に関して、最も深刻な事実も隠蔽される。また研究も「しない・させない・知らせない」の姿勢がまかり通っている。細胞分裂が盛んで未分化なほど放射線感受性が高く、影響を受けやすいという点からは受精卵・胎児・新生児の順に影響を受けやすく、そのため流産・死産・先天障害などに繋がるが、これは過少評価する。

長寿命放射性元素体内取込み症候群として発がんも含め多くの慢性的健康被害の原因となる内部被曝の問題も軽視され、被曝線量の計算も全身化換算にして極少化する誤魔化した操作が行われている。こうした隠蔽されている重要な事実の一つにトリチウム（三重水素）の問題がある。トリチウムは水素の放射性同位体であり、原子核は陽子1つと中性子2つから構成され

ている。

原発は事故を起こさなくても稼働しているだけで大量のトリチウムを発生させ、気体（蒸気）としても液体（水）としても放出している。水の形で存在しβ線を出すため除去することはできず、今回の福島原発事故後はセシウムやストロンチウムだけではなく、大量のトリチウムが放出されているが、トリチウムはアルプス装置では分離出来ないためジャジャ漏れの状態である。以前からトリチウムの危険性は指摘されており、1985年には母乳を通して胎児に取り込まれることが報告されている。また動物実験の結果では卵巣に腫瘍が発生する確率が5倍増加したり、精巣萎縮や卵巣の縮小、脳腫瘍、周産期死亡率の上昇なども指摘され、発育障害や奇形の胎児も観察されている。

カナダの重水を用いる原子炉

した場合は、年間33京（ケイ、¹⁰）Bqの排出管理目標数値

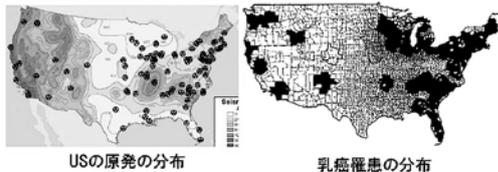


図1 米国の原発稼働地域と乳癌罹患率の関係

(CANDU炉)のトリチウム排出と、その結果の周辺地域に住む子ども達の健康被害が調査され、ダウン症、新生児死亡率、小児白血病の増加などが報告されている。また1992年と1998年に2度調査が行われたドイツの原子力発電所周辺の健康障害調査(KiKK調査)では、原子力施設周辺5km以内の5歳以下の子供には明らかに影響があるとされ、調査地域50kmの範囲の全てのがん発病(PII0・0034)と白血病(PII0・0044)に対してこの結果は有意で偶然とは考えにくいと報告されている。

図2 北海道における悪性新生物原因の標準化死亡比 (standardized mortality ratio:SMR)

★「主要死因の概要Ⅱ」
1983年～1992年の10年間
泊原発1号機 1989年6月営業運転
泊原発2号機 1991年4月営業運転
泊原発3号機 2009年12月営業運転
★「主要死因の概要Ⅷ」
2003年～2012年の10年間

	概要Ⅱ		概要Ⅷ	
	SMR	順位	SMR	順位
泊村	117.8	22	152.7	1
岩内町	107.8	72	134.6	2
北海道	106		106.3	

グラフは削除されたため、泊原発の稼働前後の10年間の概要を計算しなおすと、やはり泊村が1位で、2番目に多いのは隣町の岩内町であった(図2)。

であり、これは福島原発事故(77京Bq)の43%である。また100万キロワット級の原発が1年間で放出するトリチウムを一日で出すと言われる。このため、原発稼働地域住民のがんの発生が多くなることが予測される。ちなみに(財)北海道健康づくり財団(主務官庁・北海道知事、理事長・北海道医師会長)の報告では、泊村のがん死亡率は断トツに多く、道内180市町村別の「がん死亡」は、泊村は2、450人/10万人であり、中間の1、120人/10万人の倍以上のがん死亡者数であり、グラフが掲載されていた。しかし、福島原発事故後はこの

なお、泊原発3基からこれまで放出されたトリチウムの累積量は571兆ベクレルとされている。この事実は誰も気にとめず、報道されることもないが、原発稼働によるトリチウムが健康被害の要因であると考えられる。政府はトリチウムのエネルギーは低いので心配いらないと強弁しているが、人体内の元素の結合energyは5・7eV前後であり、約千倍のエネルギーなのである。トリチウムは半減期12・3年の放射性物質で、β線を出してヘリウムになるが、そのβ線エネルギーは平均5・7KeVであり、1μm以下の飛程ではあるが、DNAに取り込まれることが判明している。そして遺伝子情報を持っているDNA内の二重螺旋構造を作っている4つの塩基は水素結合力で結びつき配列をしていることから塩基間に働く水素結合の破壊が深刻な被害の原因となりえるのである。原発稼働は事故の有無にかかわらず健康被害をもたらす可能性があるが、代替可能な手段があるにも関わらず稼働させることは見識のある人間のすることではない。コスト・ベネフィットの方便も使用済み燃料棒の処理や廃炉に向けた費用を考えるとこの理屈も正当性は無いのである。

10・10さようなら原発・戦争 北海道集會に参加して

十勝連絡会 森 本 麗 子

10月10日(土) 爽やかな秋の空に、総勢3500名のコールが響き渡りました。十勝連絡会は、6月から10・10集會の取り組みを開始しました。しかし、全道集會実行委員会の呼びかけの公表が大幅に遅れ、その結果、取り組みが前進せず、大型バス1台の人数を集めるのがやっとでした。悔しいです。それでも33名で集會に参加できました。

そして印象的だったゲストトーク。呼びかけ人の小野有五さんは、奥様が亡くなられたことに触れ、「最期まで戦争法案のことに気にかけていた。全ての原発を止めるという妻の遺志を継ぐ」と決意を語りました。西尾正道さんは「原発の稼働だけで健康被害をもたらす。全く報道されないが泊村と岩内町の癌発生率は高い。原発から漏れ出るトリチウムが原因だ。長寿命放射線元素体内取込み症候群を覚えて帰って」と具体的に説明しました。元経産省官僚の古賀茂明さんは「IAMN OT ABEと世界に発信しよう」と訴えました。小樽商大の名誉教授、結城洋一郎さ



んは「次の選挙とそれまでの運動が大切」と強調。あさこはうすの小笠原厚子さんは「あさこはうすの監視体制が強化されている。絶対に諦めない。来年は一人があと一人を連れて来よう」と訴えました。

来年は更に多くの共闘の友と札幌を埋め尽くしたいと切に願います。

活動紹介

太陽熱でエコクッキング

岩見沢自然エネルギーを考えると
泊原発廃炉の会・そらち

佐々木 洋子

泊原発の廃炉をめざす脱原発の運動は同時に自然エネルギーの活用をめざす運動とともに進めなくてはならないと考え、今回(9月6日・日)は「そらち」と「自然エネルギーを考える会」との共催でのイベントでした。

参加者のみなさん(約40人)に「自然エネルギーを体感してほしい」という願いから、山の中の開催でした。太陽熱でのエコクッキングを中心に、リース作り・オフグリッドソーラーのミニWS・山ヨガ・気功・歌声喫茶・散策・コクワ採り等自由にやりたいことをして頂きました。エコクッカーは太陽さん次第でしたので、お天気



化け物を作りだしてしまい、資源を奪い合い他の民族をコントロールしようとする戦争をやめることが出来なくなってしまう

「自然エネルギーを体感してほしい」という願いから、山の中の開催でした。太陽熱でのエコクッキングを中心に、リース作り・オフグリッドソーラーのミニWS・山ヨガ・気功・歌声喫茶・散策・コクワ採り等自由にやりたいことをして頂きました。エコクッカーは太陽さん次第でしたので、お天気

になることを祈るような気持ちで当日を迎えました。お陰様で午前中は日焼けが気になるくらいの日差しになりました。午後は日陰になり過ごしやすかったです。

太陽熱でのご飯はお米の甘みが目立ち、ジャガイモは素材の美味しさがよく分かりました。ゆで卵や炊き込みご飯は熱量が足りずうまく出来上がりませんでした。自然の力とは私たちの思い通りにコントロール出来る物ではないことに気づかされました。そして、自然に感謝しながら生きることを忘れないようにしたいと思いました。人間も自然の一部だと思ってしまうと、原発のような

うだろうと思います。山の自然の中に身を置き、恵みをいただき、自然を感じながら歌い、笑顔で過ごす!こんな体験をしてみると、当たり前のことですが、自然を大切に、本来の地球をそのまま未来の子どもたちへバトンを渡していかなければならないと思えました。そのために私たち一人一人が出来ること、小さなことの積み重ねを大切にしていこうと、改めて思いました。

大間原発と日本の未来

野村保子著 寿郎社 1900円+税

書籍紹介



函館市に住むフリーライターの野村保子さんが、青森県大間町の大間原発周辺をルポしたのが本書です。

チェルノブイリ原発事故が起きた1986年、以前から食の安全に関心があったこと、遠く離れた土地の事故でも、日本に影響することに衝撃を受け、原発問題を考えるようになった野村さん。

津軽海峡を挟み、対岸23キロの大間町に建設されている同原発の安全性にも関心を持ち、94年ごろから取材をスタート。「事故が起きれば、将来にわたって影響が残る。どうしても受け入れられない」。同原発の建設差し止めを求める市民訴訟にも参加し、脱原発を訴えています。

大間町には通算50回以上訪問し、町役場や漁協、周辺住民ら関係者取材し、建設計画が浮上した76年以降、徐々に建設容認に転じた地元住民の複雑な思いなどを丁寧に描いています。

特に「この海を守っていけば、どんなことがあっても食べていける」と語り、大間町で原発反対を貫いて亡くなった熊谷あさ子さんの思いも伝えます。

世界で初めてのフルMOX原発は大変危険な原発です。大間原発で事故が起きれば、食糧基地としての豊かな北海道は失われます。建設中止になるよう、私たちが連帯をしていかなければと思います。

(世話人・樋口みな子)

原発－世界の潮流

知事は住民を避難させられるのか
－シヨアハム原発の場合－

共同代表 常 田 益 代

伊方原発は瀬戸内海に細く長く突き出した佐田岬半島の付け根にある。この地形を見ると、どうしてもニューヨーク市の東方に細長くのびるロングアイランド島とシヨアハム原発のことが思い出される。愛媛県の中村知事は住民の避難に不可欠な道路整備さえ終わっていない中、10月26日再稼働に同意した。一方、1989年2月、マリオ・クオモ知事（当時）は「万一、原発事故が起きたら、住民を安全に島から避難させることは不可能である」という一点の理由で、完成直後の原発を未使用のまま廃炉にした。その経緯はこうだ。

シヨアハム原発の建設工事は1973年から始まっていた。しかし、1979年にスリーマイルアイランド原発事故（レベル4）が起き、14万人の自主避難者をだした。この事故を機に市民の反原発運動が活発化したのは言うまでもない。



シヨアハム原発
出典：ウィキペディア

避難時の混乱ぶりを教訓に、米国原子力規制委員会は電力事業者に対し、州と地方自治体と協力して緊急時の避難計

画の策定すること、また現地とオフサイトで実施訓練をすること、を義務づけた。加えて避難計画の有効性と実施評価も稼働免許の条件とした。机上の避難計画をいざ実施してみると、陸路で避難する場合、マンハッタン島へ通じる橋まで97キロもあり、住民を安全に避難させることは不可能であることが判明した。

原発の完成を目前に避難計画の議論はつづいたが、1983年NY州サフォーク郡議会は投票により「現実的に避難は不可能である」という結論を出した。これを受けたクオモ知事は、事業者（Long Island Lighting Company）の策定した避難計画を認めないよう住民に命じる。一方、多くの地方自治体も事業者にとって稼働の条件となる避難計画の承認を拒否しつづけた。

こうしたなか1986年、レベル7のチェルノブイリ原発事故が発生。この惨事に25以上の市民活動団体が結集し活動を展開するや、ロングアイランド島の住民の実に74%が原発反対にまわった。そして3年後の1989年2月クオモ知事は事業社LILCCと共に廃炉決定を発表するにいたった。シヨアハム原発は事業者から州に移譲され、州は向こう30年間の電気料金に3%の追徴金をつけることで解決した。廃炉工事は1994年に完了している。

お知らせ

忘れない3.11メモリアル講演会

日 時：2016年3月6日（日）午後1時30分（予定）

場 所：札幌市教育文化会館小ホール
（札幌市中央区北1条西13丁目）

講演者：大島堅一氏 立命館大学教授

著書／『原発のコスト－エネルギー転換への視点』など

次回口頭弁論

2016年2月16日（火）15:30～

※傍聴希望者は事前に事務局までお知らせください。

[集 合] 14:20 大通公園西11丁目

[集 会] 15:20～ 傍聴席抽選に外れた人対象

[報告会] 16:30～17:30

[会 場] 北海道高等学校教職員センター（南大通西12丁目）

出前講座

原発に関する学習会を開催したい。そんなことを考えたことはありませんか？ 泊原発の廃炉をめざす会から、共同代表や世話人が講師として出張し、わかりやすく説明いたします。

学習会のテーマの例：原発訴訟について。核ゴミ問題について。原発事故発生時の避難計画について。などなど。

もちろん無料。少人数でも対応可能ですので、どうぞお気軽に、ご相談ください。

◎お問い合わせ・申し込み

泊原発の廃炉をめざす会事務局まで

署名集計 2015.11.13現在

「再稼働を認めない」 3,976筆
「核ゴミを持ち込ませない」 2,726筆